

平成 28 年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「共同利用型」の個人による研究 研究報告書

平成 29 年 4 月 27 日現在

研究課題名	1920-30 年代のロシア自由主義経済学と日本の経済学：A. V.チャヤノフを中心に	
申請者	氏名	所属機関・職
	大槻忠史	群馬大学・非常勤講師

研究成果の概要

本課題は、1920-30 年代のロシア自由主義経済学が同時代の日本の経済学・思想に対して与えた影響について、とりわけ A. V. チャヤノフ(1888-1937)を中心に考察することを目的とする。

従来、日本経済思想・学説史では、ドイツやイギリスからの影響について多く研究がなされてきた一方で、ロシアの自由主義経済学からの影響はほとんど考慮されてこなかった。これまで申請者は、N. D. コンドラチエフ(1892-1938)が日本の経済学の発展に与えた影響にかんする論考をいくつか発表した。その成果から判断する限りでは、彼のみならずロシアの自由主義経済学は日本の経済学に一定の影響を与えたと思われる。その中でも彼とならび重要と思われるのが、チャヤノフである。彼については、ドイツ語からの翻訳である『小農経済の原理』が 1927 年に刊行されたこともあり、以後、農業経済学者としての側面に研究の多くが集中している。

しかし同時期、チャヤノフの研究が日本の経済学に与えた影響にはもう一つの側面があった。それは、戦前日本の大陸進出に際して参考資料となるソ連の国勢統計研究である。この研究には、チャヤノフと日本の経済学の両方からのアプローチが不可欠である。本課題では、2 度の滞在期間中、チャヤノフにかんする資料の収集に重点を置いた。それらから現状言えるのは、統計の領域においても農業経済学と同様、彼の研究は主として翻訳を介して影響を与えたこと、他方で日本では貴重な資料として扱われたことである。チャヤノフの統計研究については、収集資料に基づき今後さらに進める予定である。

本課題への支援、また期間中様々お世話になったスラブ・ユーラシア研究センターおよび北海道大学附属図書館の方々、またセンター事務室の方々に対して、お礼申し上げます。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）

経済学史学会 第 81 回大会(2017 年 6 月 3-4 日、於 徳島文理大学)にて、「旧制高商に設置された調査機関のはじまりと展開」と題した報告を行い、成果の一部を利用する。

当該研究活動を基に応募中の研究プロジェクト（科研費等）

2017 年度に、科研費に応募する予定である。

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。